HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	＜第1回研究会＞北海道の地域別「豊かさ指標」の開発(予備調査の結果)
Author(s)	町野, 和夫
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 3, 59-61
Issue Date	2014-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55207
Type	bulletin (other)
File Information	REBN3_059.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域経済経営ネットワーク研究センター年報　第３号
北海道大学　2014 . 3

＜第１回研究会＞

北海道の地域別「豊かさ指標」の開発（予備調査の結果）

町野　和夫

はじめに

社会的厚生あるいは豊かさを測るため1960年代頃から欧米及び日本で開発されてきた様々な指標はなかなか定着せず，今でも様々な場面で（一人当たり）GDPが，国や地域の豊かさを測る指標として使われている。近年，幸福度に関する研究が盛んになっているが，これが新たな指標として定着するのか，これまでの社会指標の失敗の歴史の一つになるのか，まだ結論は出ていない。しかし幸福度指標に使われる主観的指標は各地域で作成が可能であり，適切な指標ができればその地域の政策立案・評価に役立つことは言うまでもない。本研究はそのような指標づくりのための予備調査である。

豊かさ指標の開発の試み

本研究では予算制約のため，全道を網羅的にカバーするようなアンケート調査はできなかったので，できる限り既存のデータを使用した。客観指標については総務省の「統計でみる市区町村のすがた」（2012）のデータを使用した。主観的指標は，まず，北海道が長期計画を立てる際に行った「新しい総合計画策定に係る道民意向調査（道民ニーズ調査）」（2006）を利用して全道をカバーする指標の作成を試みた。ただし，「道民ニーズ調査」はデータが古く，また，その後の幸福度に関する研究の成果が反映されていない。そこで次に札幌圏とオホーツク圏の二つの生活圏で100世帯ずつ選んでアンケート調査を行った[1)]。質問項目

は，比較しやすいように「道民ニーズ調査」の項目を活かしながら，幸福度に関する主観的評価や，幸福度研究で重要性がクローズアップされてきた家族，友人，地域社会との絆に関連する項目を（他の項目を削って）加えた。道民ニーズ調査に基づく結果を（1）で，二地域についての独自調査に基づく結果は（2）で議論する。

（1）「道民ニーズ調査」（2006）を基に指標作成は以下の過程で行った。

i.　質問項目のうち地域ごとに重要度が高い項目に対応する客観指標を「統計でみる市区町村のすがた」の中から選択する。しかし，適切な統計データは少ないため，多くは道民ニーズ調査の各質問項目に対する満足度で代替した。

ii.　iのそれぞれの指標ごとに道内全市町村の偏差値を求める。

iii.　iiで作成した指標別市町村別の総合指標を人口比で加重平均して質問項目別「地域」別の総合指標を作成する。

iv.　iiiの指標を質問項目別「地域」別のウェイトを使って加重平均して地域別の総合指標を作成する。

1）匿名ではあるが無作為抽出ではない。アンケート対象の選定と依頼は，札幌圏は，（有）インタラクション研究所，オホーツク圏は，同研究所と北海道オホーツク総合振興局の協力を得た。

表１「地域」別豊かさ指標試算結果

地域生活経済圏	豊かさ指標（試算）値）
道央圏	48.2
道南圏	46.7
道北圏	51.6
オホーツク圏	49.9
十勝圏	51.5
釧路・根室圏	49.8

出所）町野（2013）。

試算結果は表１に示す。各生活圏の試算値とも平均値（50）前後であるが，次節の結果では数ポイント上昇しており，論点の一つとなる。また，人口の集中する道央圏は，客観的指標である「納税義務者一万人当り課税所得」,「人口１万人当り医師数」,「完全失業率」に関しては良い値を得ているが，豊かさ指標の試算結果を見ると，道南圏に次いで低い値となっている。都市部では行政に対する不満が出やすいなど，主観的指標においてそれ以外の地域との差があるのかは興味深い検討課題である。

(2) 札幌圏，オホーツク圏の予備調査（2013）を基にした豊かさ指標

地理的にも産業構造も大きく異なる札幌圏とオホーツク圏の二地域で 2013 年２月下旬から３月中旬にかけて，それぞれ 100 部ずつのアンケートを行った。幸福度研究にならって，現在の幸福度（どの程度幸せか）について０から 10 の 11 段階のスケールで尋ね（問１），その判断に際して重視した基準や事項についての質問（問２，３）をした後に「道民ニーズ調査」と類似の項目について満足度と重要度について尋ねた（問４）。問１に関して札幌圏とオホーツク圏を比べると，平均幸福度は前者が 7.27，後者が 7.24 でほぼ同じである。また，重視する基準では両地域共に「自分の理想との比較」を過半数の回答者が選択した。重視する項目では，両地域とも「家計の状況」,「健康状況」,「家族関係」を選んだ人が圧倒的に多く，次いで「精神的なゆとり」,「友人関係」も過半数が選択したが，オホーツク圏では過半数が「就業状況」も選択した。

表２「地域」別豊かさ指標試算結果の比較

地域生活経済圏	豊かさ指標（試算値）	
基礎データ	道民ニーズ調査（2006）	今年度調査
札幌（道央）圏	48.2	53.5
オホーツク圏	49.9	54.7

出所）西部他（2013）。

具体的質問項目について地域別に 2006 年の「道民ニーズ調査」との違いを見ると札幌圏（「道民ニーズ調査」での道央圏にほぼ対応）では「道民ニーズ調査」には無い家族の健康や家族内関係についての項目の重要度が高かった。これらが「豊かさ」にとって重要であることは確かであろう。オホーツク圏でも「自分や家族が健康であること」と「家族関係が良好であること」が１位と２位を占める。なお，札幌圏と比較して経済的な項目が上位にあり，経済状況が苦しいことを反映していると推測される。

試算結果は表２の通りである。どちらの生活圏においても，「道民ニーズ調査」より数ポイント高い値となっている。これは，家族の健康や家族関係についての項目の重要度が高く，かつ，その満足度が高かったことによる。ただし，数値のわずかな差を比較の判断に使うほどの精度がないことは注意すべきである。

暫定的まとめと今後の課題

以上，過去の各種指標開発の手法に学びながら，北海道の生活経済圏別の豊かさ指標の開発を試みた。予算が無くても基礎的な統計と住民に対するアンケート調査によって，指標を作成できることが分かった。また，総合指標に採用する項目の選択，総合指標の計算に用いる各項目へのウェイトに反映させることで，地域ごとに独自の豊かさ指標を開発することもできた。札幌圏とオホーツク圏に関して行ったアンケート調査では，直接，幸福度とそれを左右する要因を尋ねた。さらに，家族や友人との絆についての質問項目を加えることによって，幸福感に占める家族関係や家族の健康の重要性を明らかにすると同時に，「豊かさ指標」が，より回答者の幸福感に近いものとなるこ

とも分かった。

政府の幸福度指標開発（2011）では，指標の総合化は，それぞれの分野での特徴を隠すことにつながるので行わないという方針が出された。しかし，本指標のように地域ごとに使われる指標の組み合わせが異なり，重みである重要度も異なる場合は，比較のため総合指標を作ることにも意味がある。

もちろん，この研究はまだ緒に就いたばかりであり多くの検討課題がある。とくに具体的な政策への応用という点では，主観的指標は客観的指標に比べて，指標改善のために何をすべきかを考えるのは難しい。しかし，それ故に政策主体間の工夫やアイディアの差が出てくる。地域の独自性，中央からの自立，地域間の切磋琢磨を促す効果も期待できる。２地域で試作した今回の指標を改良し，他地域についても，それぞれの地域独自の政策に応用できるような「豊かさ指標」を開発するのが次の課題である。（その後の指標の改訂については本報告書所収の著者の論文を参照）

参考文献

内閣府幸福度に関する研究会（2011）『幸福度に関する研究会報告―幸福度指標試案―』平成 23 年 12 月（http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/pdf/koufukudosian_sono1.pdf）。

北海道（2006）「新しい総合計画策定に係る道民意向調査（道民ニーズ調査）」。

総務省統計局（2012）「統計でみる市区町村のすがた 2012」http://www.stat.go.jp/data/ssds/5b.htm）。

西部・平本・町野・吉見（2013）「地域の多元的価値を測定するための豊かさ指標の開発とその地域政策への応用可能性の研究」『北海道開発協会平成 24 年度助成研究報告書』北海道開発協会。

町野和夫（2013）「地域の『豊かさの指標』開発の可能性と課題」地域経済経営ネットワーク研究センター年報，第 2 号，37-54 頁。

_____（2014）「新たな豊かさ指標の試み―予備調査からの考察」地域経済経営ネットワーク研究センター年報，第 3 号，77-86 頁。